

郷土史への扉



ましたが、天慶三（九四〇）年に性空上人が霧島山に登り、高千穂峰西麓の高千穂河原の瀬多尾越（古宮址）に社殿と別当寺の華林寺を再興しました。

今年は、^{*1}霧島神宮が正徳五（一七一五）年に現在の地に造営されてから三〇〇年を迎えます。そこで、前回から霧島神宮の歴史について紹介します。

今回は霧島神宮の創建から現在に至るまでの変遷について紹介します。

火山噴火と霧島神宮

霧島神宮は、昔は西御在所霧島權現^{*2}社と称し、^{*3}別当寺は霧島山錫丈院華林寺と呼ばれていました。

造営二百年 霧島神宮 その①

^{*3}『薩藩旧記雜錄』によると、第二

十九代欽明天皇の時代（五四〇年）に、慶胤^{けいいん}という僧が高千穂峰と御鉢の中間に位置する背門丘に社殿を造営したのが初めてであると書かれています。と

ころが、延暦七（七八八）年七月の霧島噴火によつて社殿は消失し、その後、永い間そのままの状態になつてい

た。この争乱に巻き込まれていきました。この再興は困難だったと思われます。

正徳年間の再興

その後、霧島神宮は宝永二（一七〇五）年十二月に華林寺から出火し、社殿を含め全ての建物が焼失しました。

そして、三〇〇年前の正徳五（一七

一五）年に第二十一代藩主島津吉貴公の寄進によって現在の社殿が建てられました。

霧島神宮は約二五〇年間、仮宮として田口待世にありました。文明十六（一四八四）年に第十一代島津忠昌公は、真言宗の僧兼慶に命じ、現在の場所に社殿と別当寺華林寺を再興させました。

文明十六年といいますと、戦国時代の初期の頃にあたります。霧島付近では税所氏と島津氏が戦い、税所氏が敗れました。所領を得た島津氏は薩摩・大隅国の統一の望みを持ち、その願いが成就することを祈念して社殿の造営に着手したと考えられます。

（文責：鈴）

このように、霧島神宮は度重なる火山噴火や出火によつて焼失しましたが、人々の深い信仰心と努力によつて再興され現在に至っています。

社殿は地形の傾斜を生かして本殿・拝殿・登廊下・勅使殿などを一直線に配しており、見る方向によつて社殿の景色が見事に移り変わる壮麗な美しさをつくり出しています。

一五（明治七年）年に霧島神宮が改称された。ここでは神宮に統した。

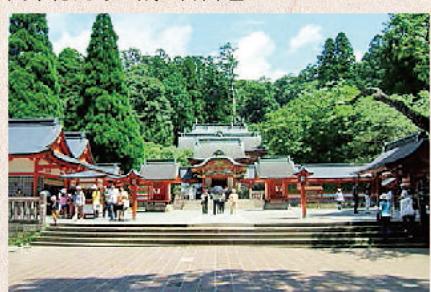
^{*1} 明治七年に霧島神社が霧島神宮に改称された。
^{*2} ここでは神宮に統した。
^{*3} 鎌倉から明治時代までの島津家・薩摩藩の文書集。明治十三年完成。



最初に社殿が造られた背門丘



高千穂河原に残る古宮址



霧島神宮社殿正面